わたしのお散歩ふぉと

220809@ＡＡたましらべZoom

2022年8月9日19:00-

資料:220905増補

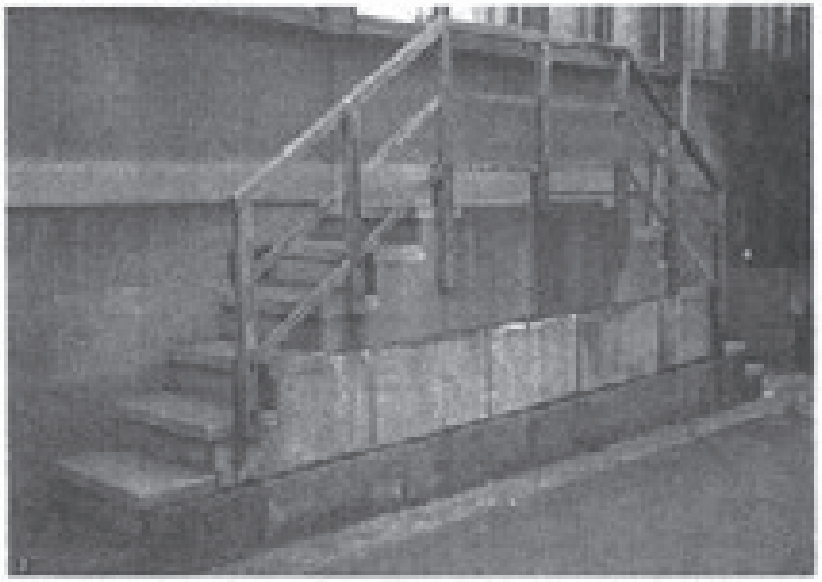
1）赤瀬川原平と路上観察学

関連の書籍から抜き出して紹介

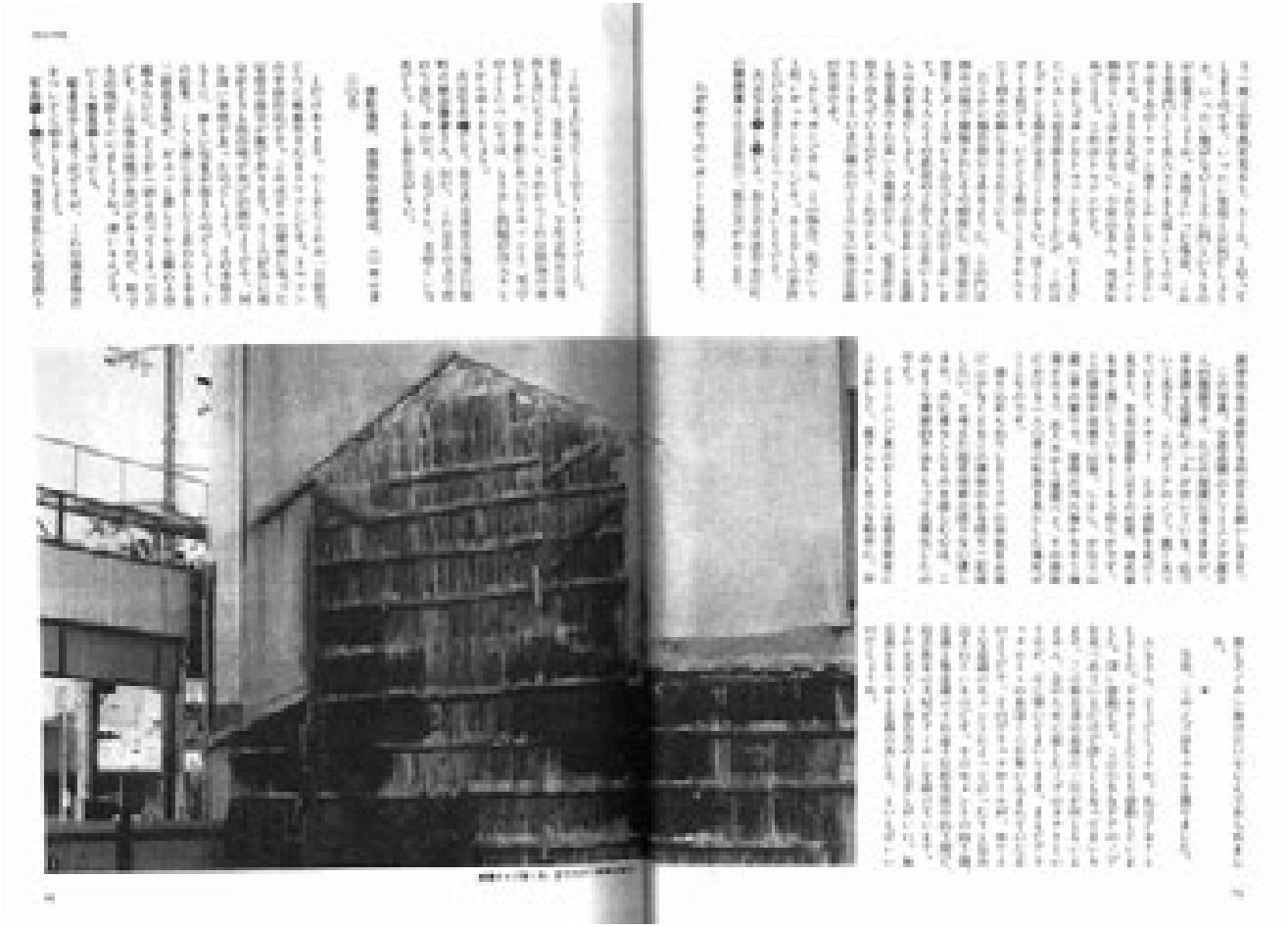
トマソン関連書籍

写真時代
photo magazine
トマソン
赤瀬川原平
大屋政子&美里美寿々
ベッサリー・マコ
六波羅舞
ヒッ
カレアタタ
サムルノリパンク
風俗
トマソン大図鑑
赤瀬川原平
トマソン大図鑑
赤瀬川原平

赤瀬川原平『超芸術トマソン』白夜書房_1985年より

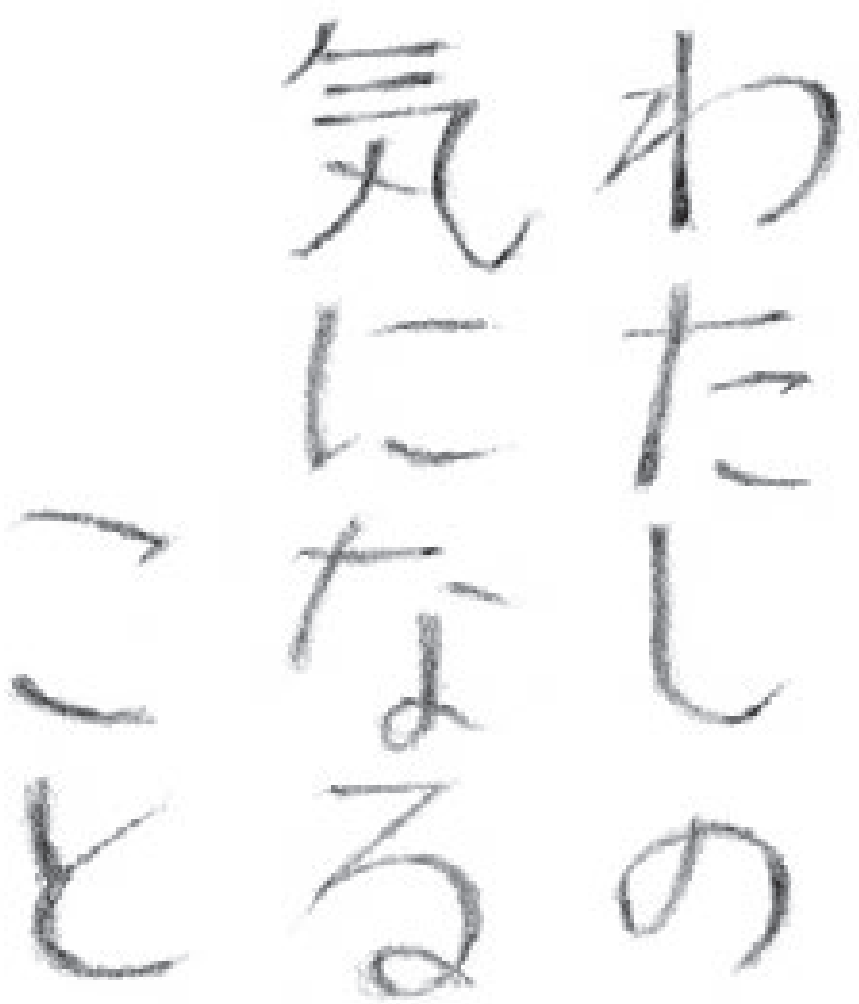


町の超芸術を探せ！



典型的な撮影例。
関心はあるものの、自身の作例は少ないことに気付いた。
→自分の視点で撮影したい欲求の方が強いのか？

過去に、『マンホールのふた』の記述にあるものと
同様のものを撮影していた。
これは近所の馬橋通りに今も存在する。



2）わたしのお散歩ふぉとから

わたしの写真アーカイブをさかなに、散歩写真を掘り下げてみる。

普段撮影している画像を分類整理してみた。

カメラをさげて

寺田寅彦

このごろ時々写真機をさげて新東京風景断片の採集に出かける。技術の未熟なために失敗ばかり多くて獲物ははなはだ少ない。しかし写真をとろうという気で町を歩いていると、今までは少しも気のつかずにいたいろいろの現象や事実が急に目に立って見えて来る。つまり写真機を持って歩くのは、生来持ち合わせている二つの目のほかに、もう一つ別な新しい目を持って歩くということになるのである。

顕微鏡も、やはりわれわれの目のほかのもう一つの目である。この目で手近な平凡なものをのぞいて見ると自分のいる周囲の世界が急に全然別物のように見えて来る。これは物の尺度の相違から来る観照の相違である。写真機の目の特異性はこれとはまただいぶちがった方面にある。この目はまず極端な色盲であって現実の世界からあらゆる色彩を奪ってしまう。そうして空間を平面に押しひしいでしまう。そうして、その上にその平面の中のある特別な長方形の部分だけを切り抜いて、残る全部の大千世界を惜しげもなくむざむざと捨ててしまうのである。実に乱暴にぜいたくな目である。それだけに、なろう事ならその限られた長方形の中に、切り捨てた世界をもいっしょに押し縮めたようなものを収めたくなるのである。それだから、カメラをさげて秋晴れの郊外を歩いている人たちはおそらく幾平方センチメートルの紙片の中に全一武蔵野《むさしの》の秋を圧縮して持って来るつもりで歩いているのであろう。少なくも自分の場合には何枚かの六×九センチメートルのコダック・フィルムの中に一九三一年における日本文化の縮図を収めるつもりで歩くのであるが、なかなかそううまくは行かない。しかしそういうつもりで、この特別な目をぶらさげて歩いているだけでもかなり多くの発見をすることがある。

手近な些末《さまつ》な例をあげると、銀座《ぎんざ》の裏河岸《うらがし》のある町の片側に昔ふうの荷車が十台ほどもずらりと並べておいてある、その反対側にはオートバイがこれも五、六台ほど並んで置かれてあった。その平凡な光景がカメラの目からは非常におもしろく見えるのであった。昭和通《しょうわどお》りに二つ並んで建ちかかっている大ビルディングの鉄骨構造をねらったピントの中へ板橋《いたばし》あたりから来たかと思う駄馬《だば》が顔を出したり、小さな教会堂の門前へ隣のカフェの開業祝いの花輪飾りが押し立ててあったり、また日本一モダーンなショーウィンドウの前にめざしの頭が二つ三つころがっていたりするのもやはりカメラの目を通して得られた小さな発見であった。

こういう目をもって見て歩いた新東京の市街ほど不思議な市街はおそらく世界じゅうどこを捜してもないであろう。極端な古いものから極端な新しいものまでが、平気できわめてあたりまえな顔をして隣り合い並び立って、仲よくにぎやかに一九三一年らしい東京ジャズを奏しているのである。こういうものに長い間慣らされて来たわれわれはもはやそれらから不調和とか矛盾とかを感ずる代わりに、かえってその間に新しい一種の興趣らしいものを感じさせられるのであろう。現代人は相生、調和の美しさはもはや眠けを誘うだけであって、相剋《そうこく》争闘の爆音のほうが古典的一和弦《かげん》などよりもはるかに快く聞かれるのであろう。そういう爆音を街頭に放散しているものの随一はカフェやバーの正面の装飾美術であろう。ちょうどいろいろな商品のレッテルを郭大して家の正面へはり付けたという感じである。考えようではなかなか美しいと思われるのもあるがしかしいずれにしても実に瞬間的《エフェメラル》な存在を表象するようなものばかりである。このような珍しい現象の記録をそれが消えない今のうちに収集しておくのは、切手やマッチのレッテルの収集よりは有意義であろうと思っていたが、近刊の板垣鷹穂《いたがきたかお》氏著「芸術的現代の諸相」の中に、このような収集の一部が発表されているのを見てなるほどと思うのであった。これらの特殊なインスチチューションの名前がまた実に興味あるものであって、これも記録しておく価値がある。近ごろ見かけた珍しいものの一つとしてはサンスクリットで孔雀《くじゃく》という意味の言葉を入り口の頭上の色ガラス窓にデワナガリー文字で現わしたのさえあった。ダミアンティやシャクンタラのような妖姫《ようき》がサーヴするかと思わせるのもおもしろい。

こういうものの並んでいる間に散点してまた実に昔のままの日本を代表する塩煎餅屋《しおせんべいや》や袋物屋や芸者屋の立派に生存しているのもやはり印画記録の価値が充分にある。

六国史《りっこくし》などを読んで、奈良朝《ならちょう》の昔にシナ文化の洪水《こうずい》が当時の都人士の生活を浸したころの状態をいろいろに想像してみると、おそらく今の東京とかなり共通な現象を呈していたのではないかと思われることがしばしばある。惜しいことにそのころの写真が残っていない。しかしそのつもりで後代の風俗絵巻物でも細かに研究してみたらやはり各時代に同様な現象を発見するのではないかとも想像される。

鳥羽僧正《とばそうじょう》の鳥獣戯画なども当時のスポーツやいろいろの享楽生活のカリカ

チュアと思って見ればこの僧正はやはり一種のカメラをさげて歩いた一人であったかもしれない。この僧正にアメリカ野球選手との試合を記録させなかったのは残念である。

新東京の街路や河岸《かし》に立って、ありとあらゆる異種の要素の細かい切片の入り乱れた光景を見るときに、私は自然に日本帝国の地質図を思い出す。いろいろの時代のいろいろの火成岩や水成岩が実に細かいきれぎれになってつづれの錦《にしき》を織り出している。この事実は一方では地震や火山の多いこととも関係するが、一方ではまた日本の風景の多種多様なことや、ひいてはまた国々の郷土的色彩の変化の多いこととも連関していると思われる。われわれの祖先から住み古したこの国土の地質自身からがすでにあらゆる世界じゅうのものの縮図的にできているのではないか。その上に、人種の上から考えても、灰色の昔から、日のいずる方《かた》を求めて世界のあらゆる方面から自然にこの極東の島環国に集中した種族の数は決して二通りや三通りでなかったであろうということは、われわれの周囲の人々の顔の中にギリシア型、ローマ型、ユダヤ型をはじめインディアン型、マレイ型、エスキモー型からニグロ型までことごとく標本的に具備しているという簡単な事実からでも想像される。あらゆる民族の中の勇敢な進取的な連中が自然に寄り集まってできた国だとすれば、日本は世界じゅうでいちばんえらい国でなければならないはずである。

それは疑問としてもその上にまだ山川風土でありとあらゆる多様のタイプを具備している。実際一千島《ちしま》カラフトの果てから台湾《たいわん》の果てまで数えれば、気候でもまず文化民の生活に適する限り一通りはそろっている。こういう珍しい千代紙式に多様な模様を染め付けられた国の首都としての東京市街であってみれば、おもちゃ箱やごみ箱を引っくり返したような乱雑さ、ないしはつづれの錦の美しさが至るところに見いだされてもそれは別に不思議なことでもなければ、慨嘆するにも当たらないことであるかもしれない。そしておそらく古い昔から実質的には今と同じ状態がなんべんとなく少しずつちがった形式で繰り返されながら、あらゆる異種の要素がおのずから消化され同化され、無秩序の混乱から統整の固有文化が発育して来ると、たとえだれがどんなに骨を折ってみても、日本全体を赤色にしろ白色にしろただの一色に塗りつぶそうという努力は結局無効に終わるであろうと思われる。それにはまず日本の地質から気候から改造してかからなければおそらくできない相談であろう。日ごろからいだいていたこんな考えが昨今カメラをさげて復興帝都の裏河岸《うらがし》を歩いている間にさらにいくらかでも保証されるような気がするのである。

西洋を旅行している間に出会う黄色い顔をした人間が日本人であるかシナ人であるかを判断する一つの簡単な目標は写真機をさげているかいないかであるといった人がある。当否は別としておもしろい話である。いったい日本人ぐらいいわゆる風景に対して関心をもつ国民が他にあるかどうか自分には疑わしい。文人画の元祖である中華民国でも、美術の本場であるフランスでも、一般人士の間にはたして日本の老幼男女に共通な意味でのよい景色を賞観する心持ちがあるかどうかわからない。少なくもアメリカの百万長者がアルプスの空気と光線に健康とエネルギーを求めて歩く間に、多くの日本人の観光客はそのほかにおまけとして山水の美の中から日本人らしい詩を拾って歩くであろう。そうして、もう一つのおみやげには思い思いのカメラの目にアルプスの魂を圧縮して持ち帰ろうとするであろう。

年じゅう同じ天気の国では天気という言葉が無意味であると同じように、どこまで行っても同じような景色ばかりの国において立った民族には風景という言葉は存在理由がないはずである。シベリアの農民やモンタナのインド人にこの言葉があるかどうか聞いてみたい。英語やドイツ語やフランス語の風景という言葉にしても、それがわれわれのいう風景とはたしてどこまで内容的に一致するかも研究に値する。それはいずれにしても、日本のように多種多様な地質気候がわずかな距離の範囲内で錯雑した国であってこそ、はじめて風景という言葉がほんとうに生きて働いて来るような気がするのである。こういう風景国日本に生まれた旅客にカメラが欠くべからざる侶伴《りょはん》であるのも不思議はないであろう。

親譲りの目は物覚えが悪いので有名である。朝晩に見ている懐中時計の六時がどんな字で書いてあるかと人に聞かれるとまごつくくらいであるが、写真の目くらい記憶力のすぐれた目もまた珍しい。一秒の五十分の一くらいな短時間にでもあらゆるものをすっかり認めて一度に覚え込んでしまうのである。

その上にわれわれの二つの目の網膜には映じていながら心の目には少しも見えなかったものをちゃんとこくめいに見て取って細かに覚えているのである。たとえばショーウィンドウの内の花を写すつもりでとった写真を見ると、とるつもりの夢にもなかったあらゆる街頭の人影の反映が写っているのである。盛り場である人がなんの気なしにとった写真に掏摸《すり》が椋鳥《むくどり》のふところへ手を入れたのがちゃんと写っていたという話を聞いたこともある。

記憶のいい写真の目にもしくじりはある。

飛行船が北氷洋上で氷原をとった写真を現像したら思いもかけぬ飛行機の氷の上に横たわる姿が現われたので、これはきっと先年行くえ不明になった有名な老探検家の最後を物語るものだろうと

いう事になったが、よくよく調べてみると、これは写真技師がうっかり一枚のフィルムに二度写しをやったために、平凡な無事な飛行機の幽霊が極北の氷上に出現したことになったのだそうである。われわれの記憶にはこんな失策は有りがちであるが、このようなカメラの思いちがいは珍しい。活動映画のオーヴァーラップの技巧はつまり故意にこのカメラの記憶のアベレーションを利用して観客の心のアベレーションを誘発しようとするのであろう。このごろのアサヒグラフの表紙裏に出ている二重写しのお慰みの当てものなどはいちばん罪が浅いほうであろう。

カメラをさげて歩いている途中で知人に会ってちょっと立ち話をするとする。そのとき、相手の人によると自分のカメラをさげていることなどにはあまり無関心なように見えるが、また人によると、何よりも第一にすぐ写真機に目をつける人もある。同病相哀れむゆえんであろうか。

いちょうの黄葉は東京の名物である。しかしいくらとっても写真にはあの美しさは出しようがない。そのいちょうも次第に落葉して、箒《ほうき》をたてたようなこずえにＮＷの木枯らしがイオリアンハープをかなでるのも遠くないであろう。そうなれば自身の寒がりのカメラもしばらく冬眠期に入って来年の春の若芽のもえ立つころを待つことになるであろう。

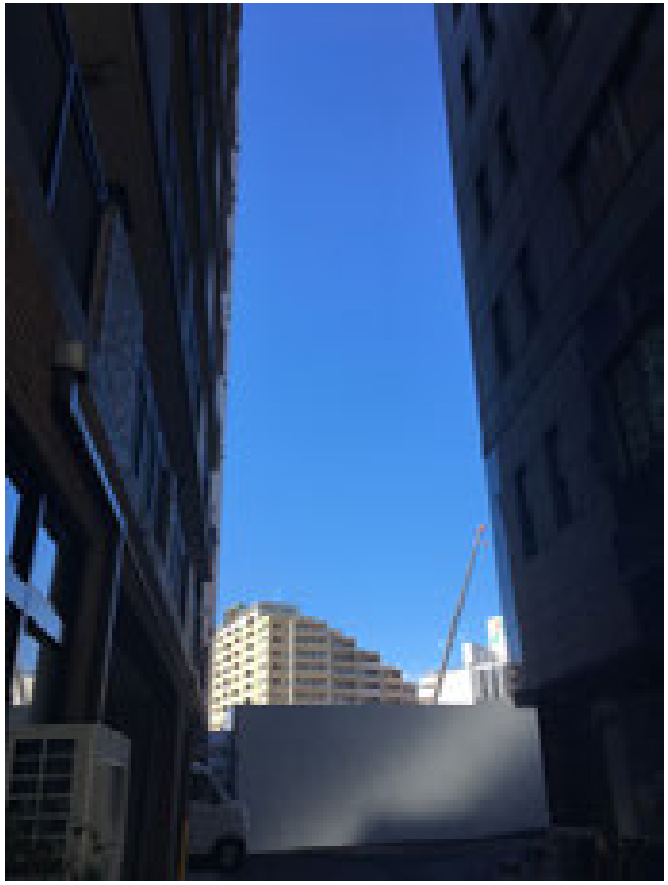
（昭和六年十一月、大阪朝日新聞）

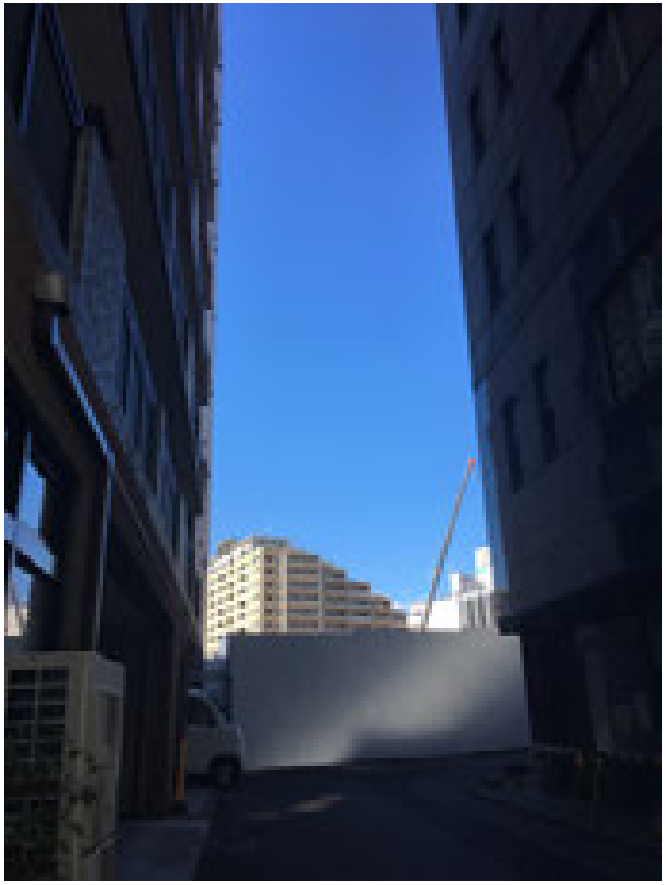
原宿にて、iPhoneにて撮影。この文章を読みながら、イメージされる画像を選んでみた。
撮りたいシーンに遭遇するときにカメラを持っていないことは多い。
スマホはそんなシャッターチャンスを増やしてくれる強力なツール。

青梅にて、一眼レフにて撮影。過去になにげなく撮影した画像に、ほかの人の関心事が写っているのは単純に嬉しい。
とりあえず、気になるものはとっておくのは、デジタルならではのこと。あとでみかえしてみるのも重要。とんでもないものが映っていたりすることも。

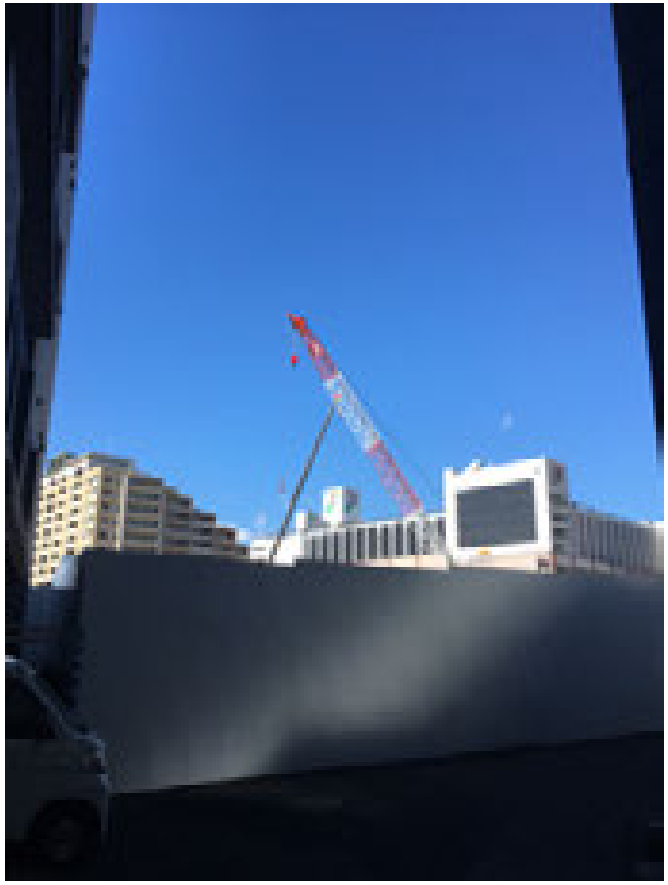
**わたしがお散歩ふぉとに
目覚めた1枚として、
今も強く印象に残る光景。**

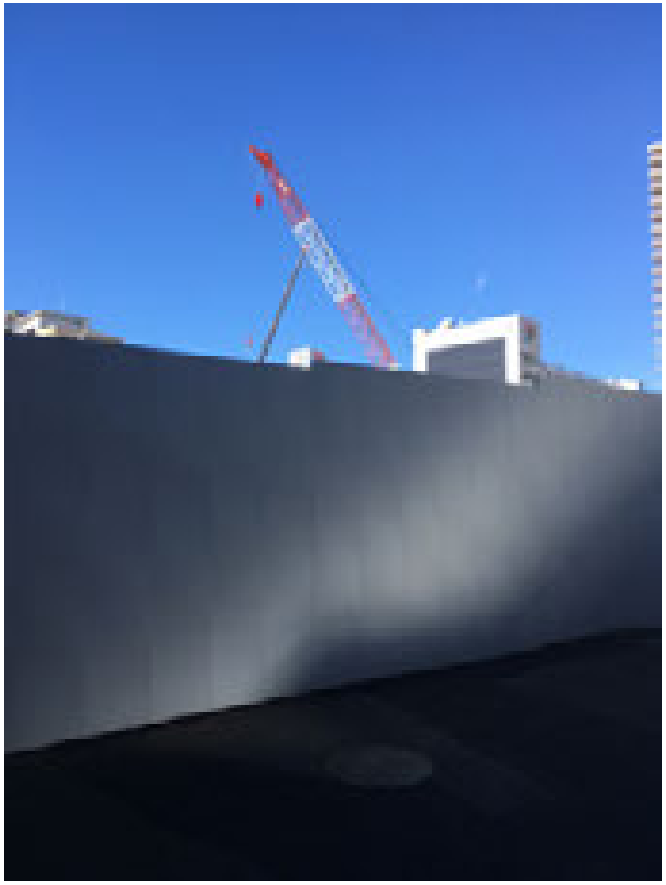
iPhoneにて撮影。なにげなく路地に入り込んだ瞬間に目に入った光景は白昼夢のようだった。
この日のひんやりした空気の中にも陽射しに暖かさを感じる感覚が思い起こされます。
電柱・クレーン・白いフェンスと青空。工事現場など好きな要素だけで構成されていることも忘れられない理由。





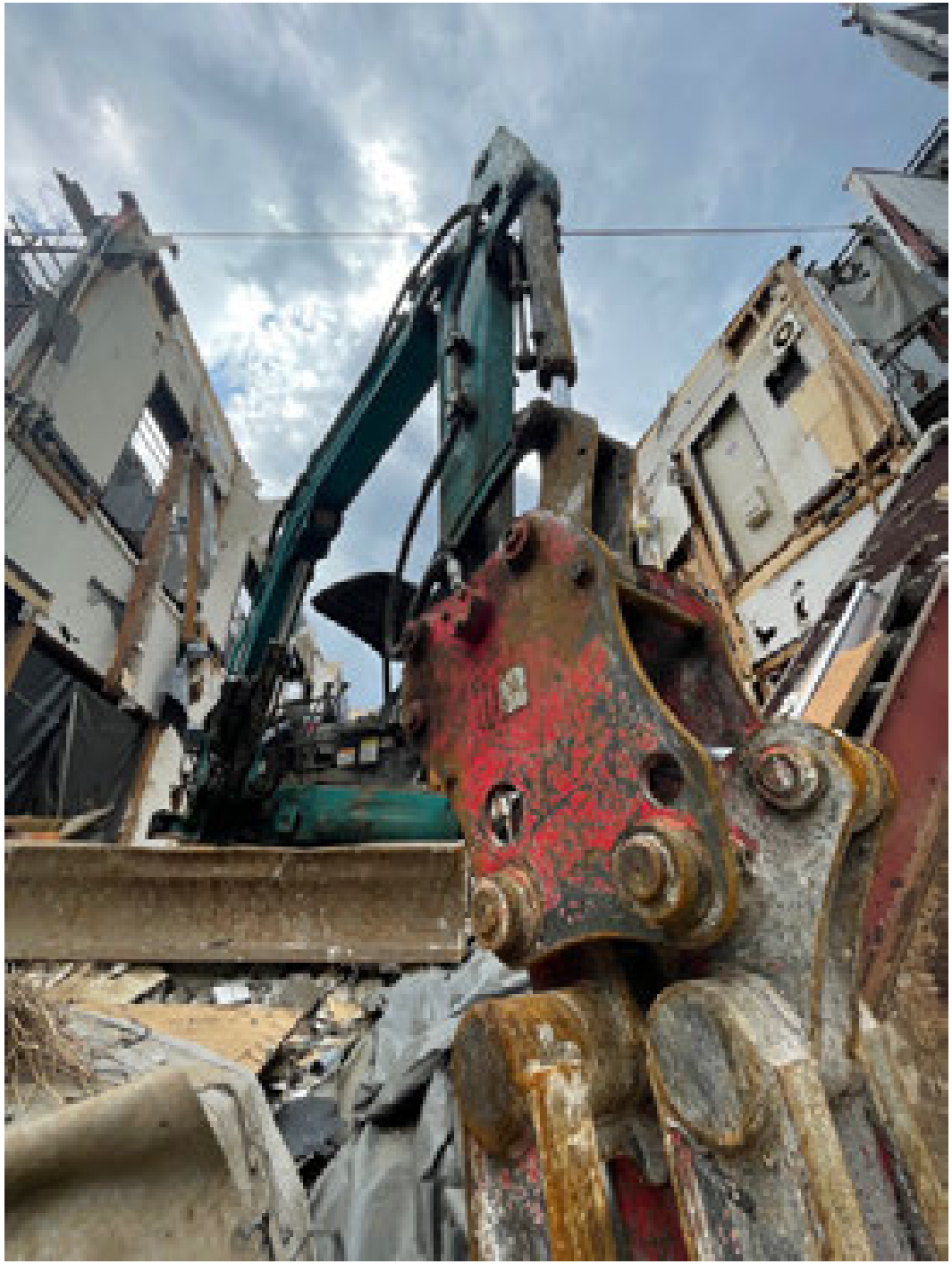
2017年11月16日

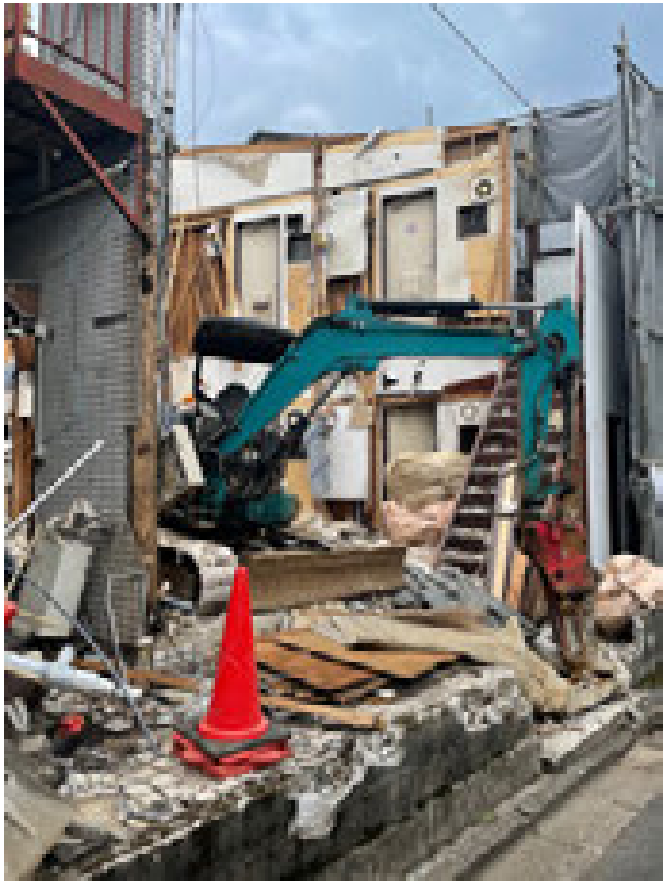




**使用してきた歴代iPhone。
性能の向上にともなって
撮影枚数も格段に
増えてきている。**

現在使用している12miniは飛躍的に性能が向上している。特に暗闇に強いことで、夜散歩の写真もふえた。人間の目で見た印象に近い画像が簡単にえられるのも日記的な使用目的にはかなっていると思う。





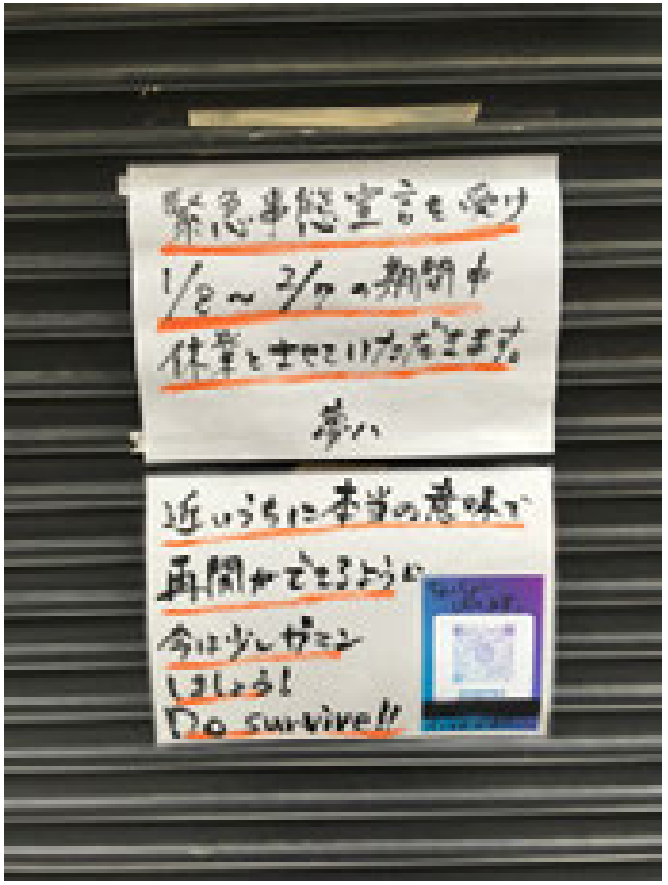
好きなモチーフ｜解体工事現場

散歩中に見かけると必ず撮影する出来事の1つ。
廃墟趣味と解体前の風景へのノスタルジアからであろうか。ダイナミックに変化する風景はフォトジェニックでもある。
このたてものは、30年前にわたし自身がすんでいたアパートである。1階の手前から2つめ。特に深い思いがあるわけではないが、ふと壊される建物ゆかりの人を思ってしまう。興味半分で撮影するのはどうかとも思う出来事であった。

日常の記録｜令和とコロナ

日記的な記録。常に携帯し簡便に撮影できるスマホだからこその撮影。HDRや暗がりに強い性能など、わたしの記憶に近い像を残してくれる。

日常の記録｜令和とコロナ

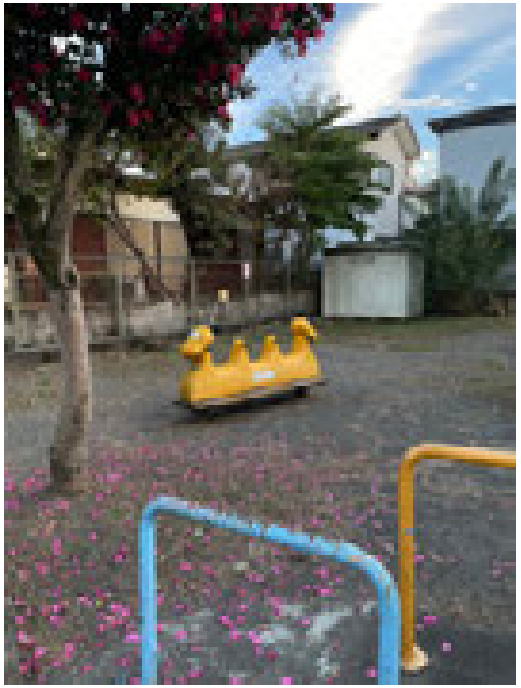


営業自粛の張り紙をコレクション的に撮影していた。
ここでは割愛するが、最初の熱気に溢れる表現から、 1年-2年を経て、事務的な内容への変化を読み取ることができて、興味ぶかい

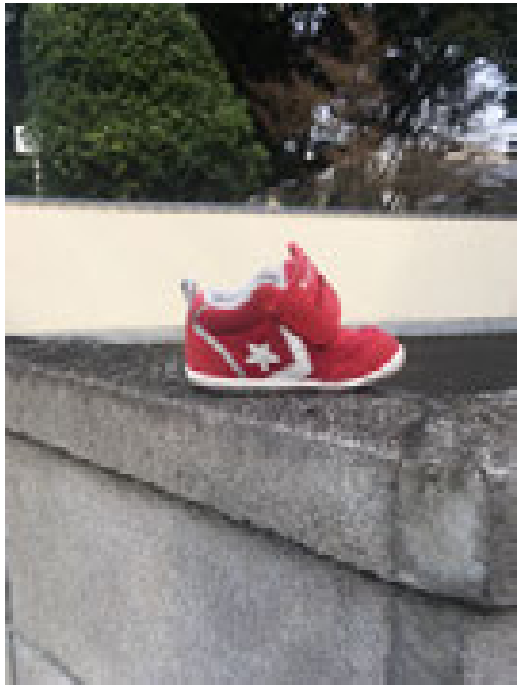
2020年5月13日

乱雑に貼られたテープに当時の混乱ぶりが思い起こされる。
そのなかでも鯉のぼりのおもちゃは誰の心遣いなのか。あるいは皮肉ともとれる。

コレクション｜公園遊具

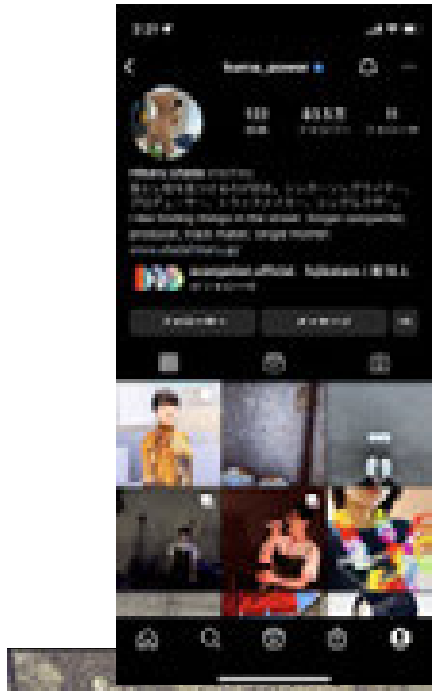


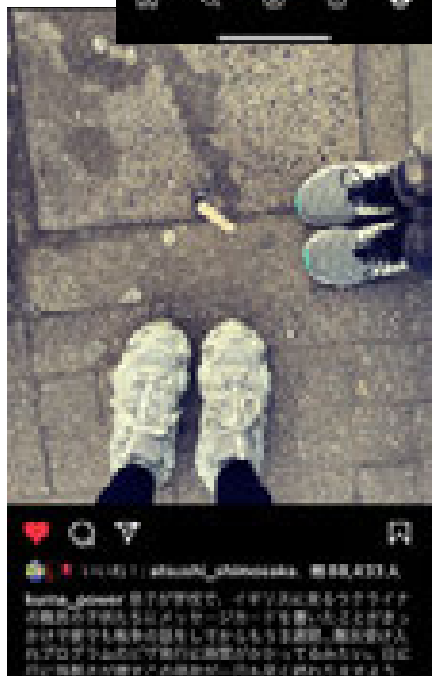
形がおもしろいものを選んで撮りためている。グーグルレンズで画像検索をかけると製造元などに簡単にたどり着けるのもネット社会ならでは。



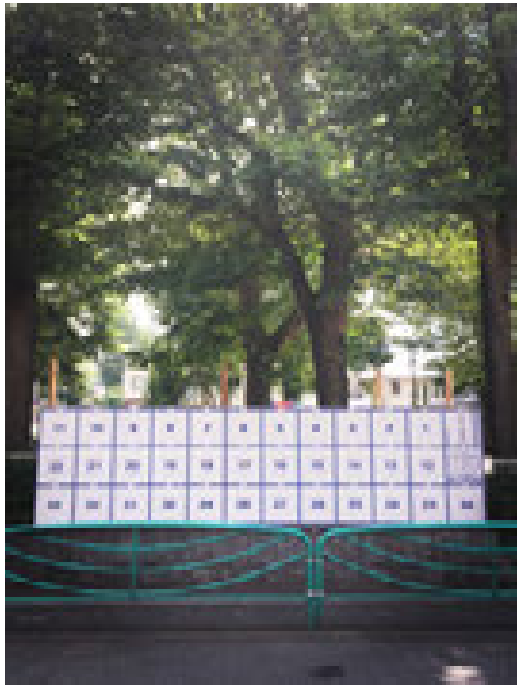
コレクション｜落とし物

落とし物で注目すべきは、どこにおかれているか。塀の上などわかりやすい目立つ場所におかれていたりして、みつけた人の心遣いが感じられる。
シリカゲル（実物）はわたしのコレクションテーマでもある。
右は宇多田ヒカルさんのインスタグラムから、かならずご自身の足元がうつっているのがミソか。

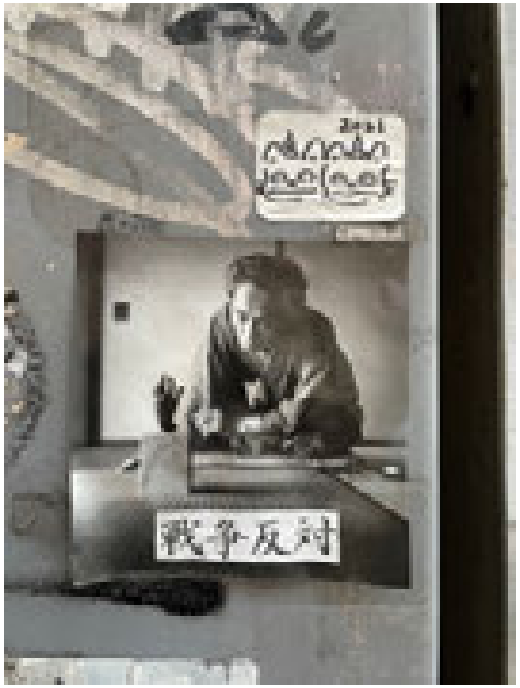




この段階の掲示板は、まだ用をなしていないので、トマソン的状態ともいえる。結局実用品なので残念。
それにしてもデザインに違いがあるとは思わなかった。地方選挙のみ？　立川の白木はユニーク。

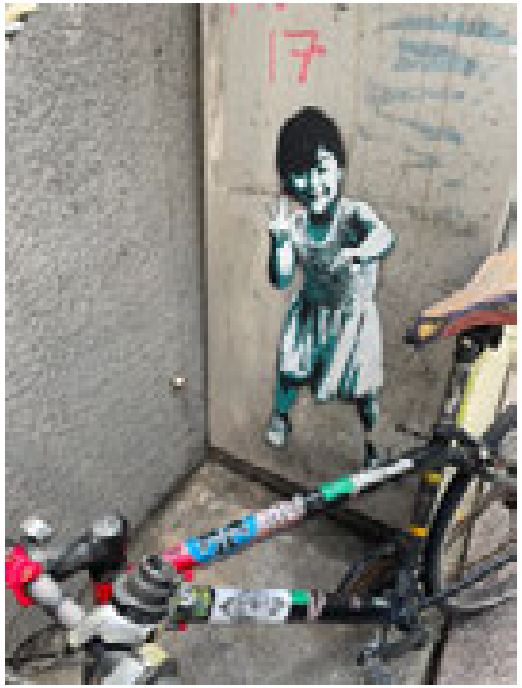
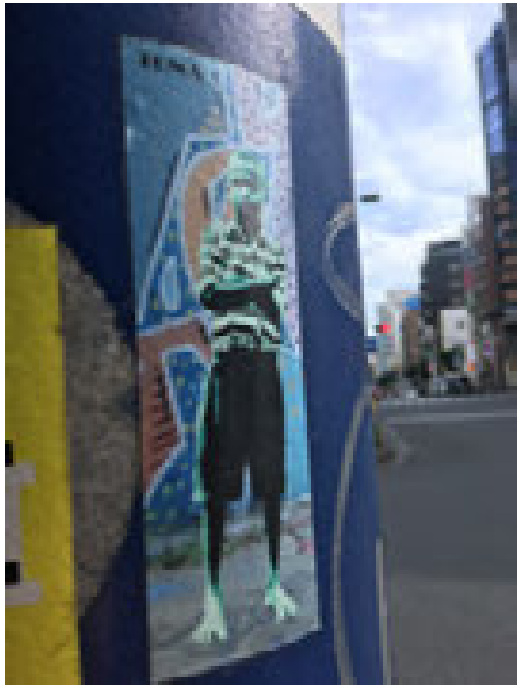
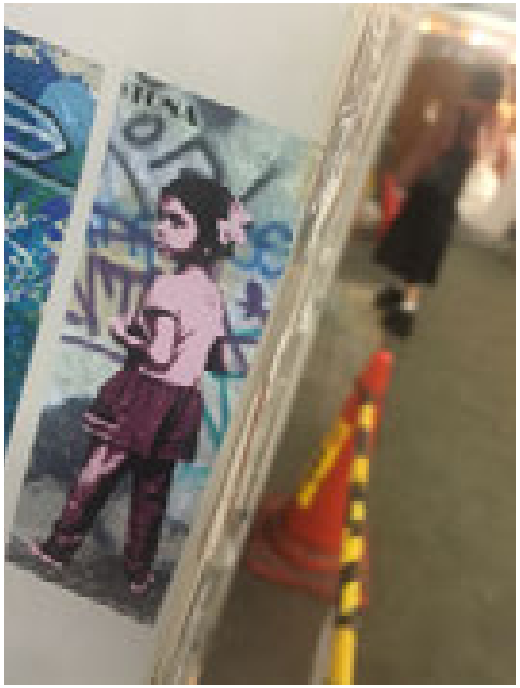


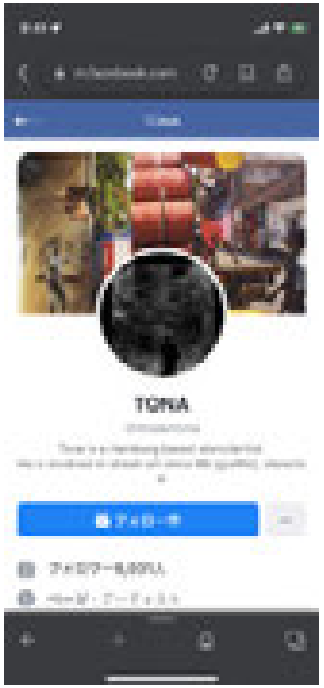
高円寺は町中ステッカーだらけだ。もっともこのシリーズは雑誌などのキリヌキに文字を貼った簡素なもの。最近のご時世を反映しているのかと思ったが、上段左はじは2020年のもの。



コレクション｜ステッカー｜TONA

ハンブルグを拠点に活動しているアーティストらしい。大きなものは4版のステンシルで写真的な表現をしたグラフィティーアート。
ステッカー・グラフィティーとも基本的には違法ではあるが、この大きなサイズのものは許可をとっての制作かもしれない。



定点観察｜貼り紙｜猫を探しています。

2年近い期間、たびたび更新されながら見受けられた貼り紙。ぼろぼろになった姿は飼い主の心情を代弁しているかのようで、痛々しい。
まあ、電柱の貼り紙も無許可ではあるのだろうが。

2020年7月23日

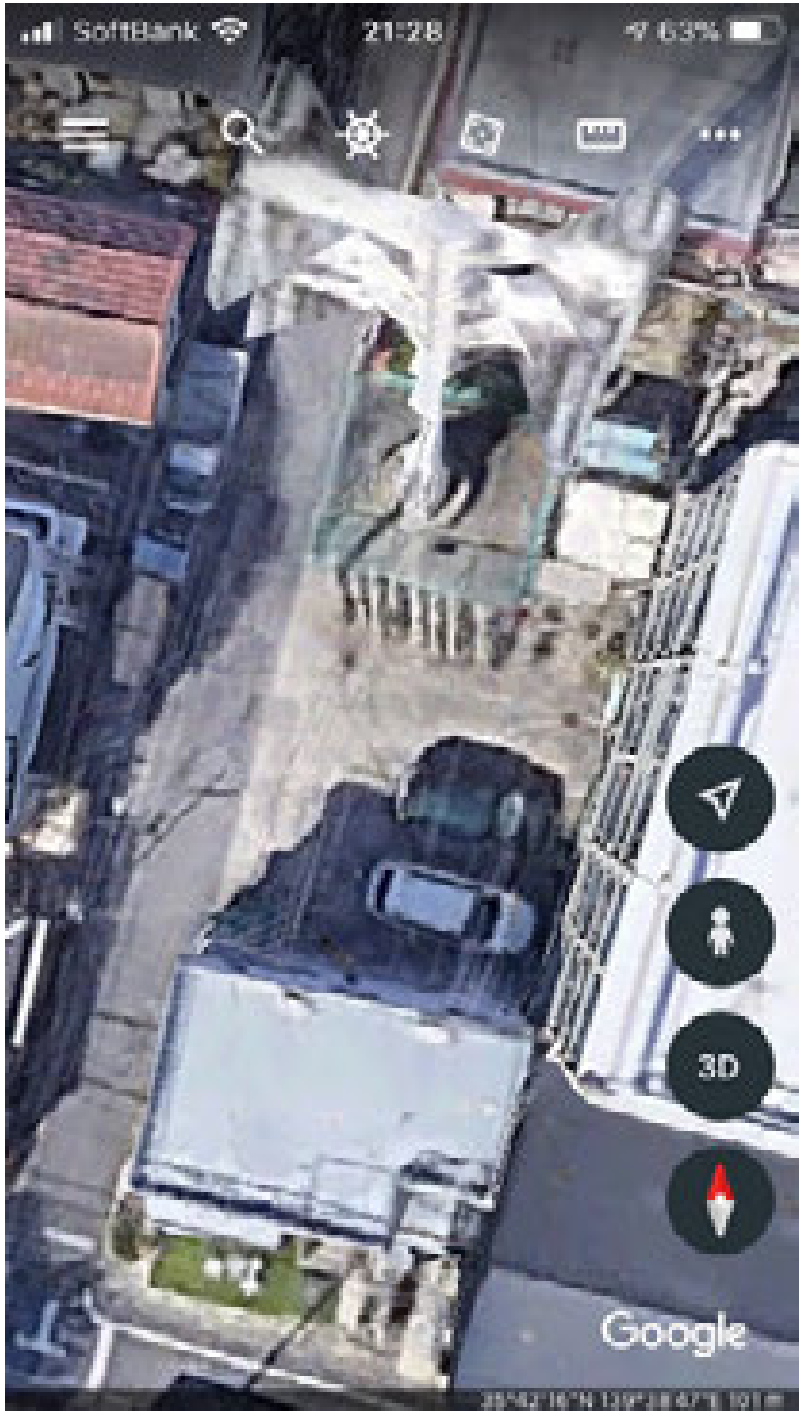
2022年5月2日

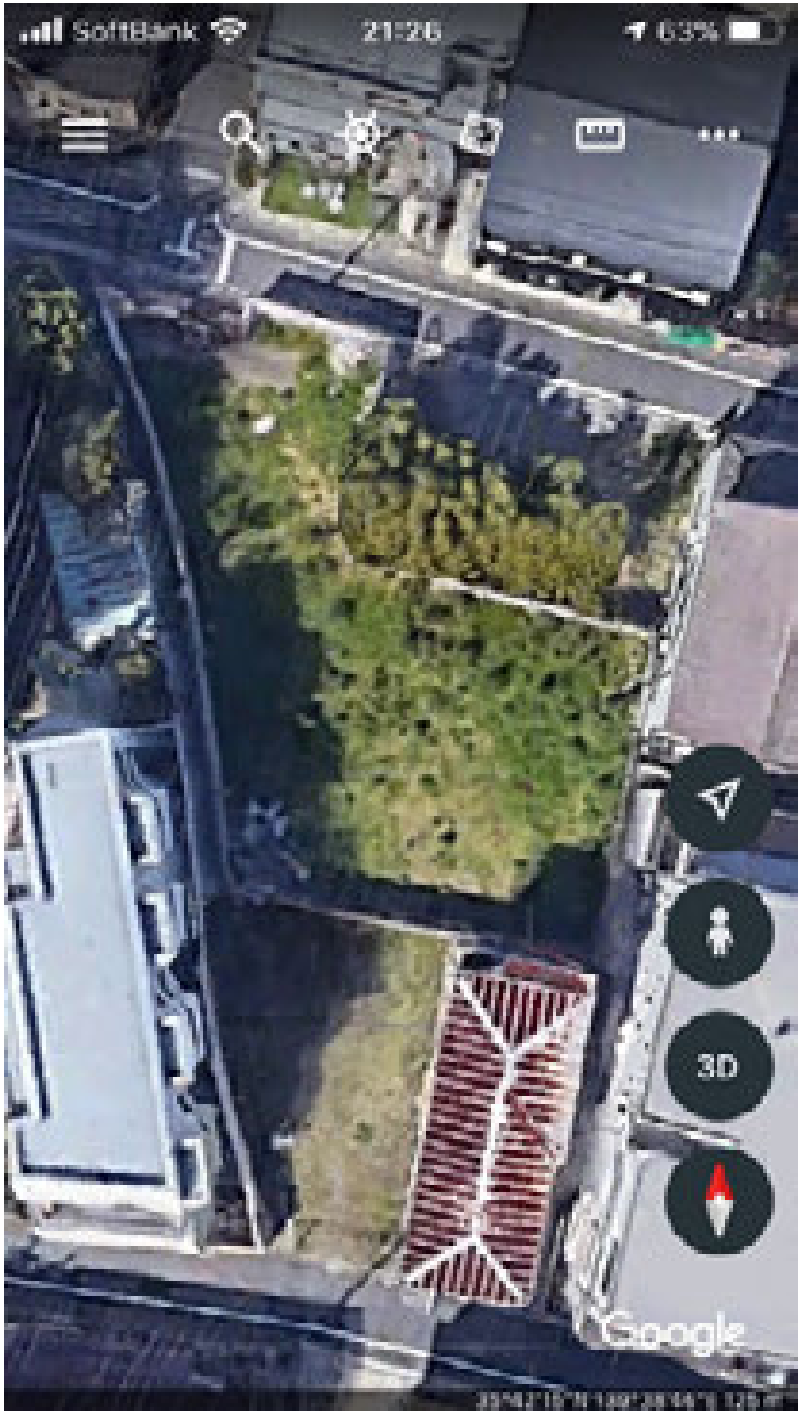
定点観察｜空き地｜鉄塔杉並線が見える空き地

コロナ下で凍結されたもの、それ以前から塩漬けになっているもの。コインパーキングにしないものは雑草の管理が大変だと思う。年に数回整理されるのだが、そのたびに草の種類などに変化がある。都市のスキマ、マイナスの空間。

2019年8月5日

2022年7月23日

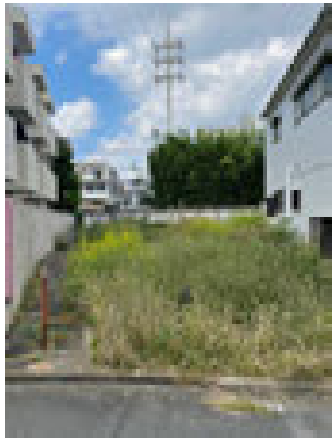


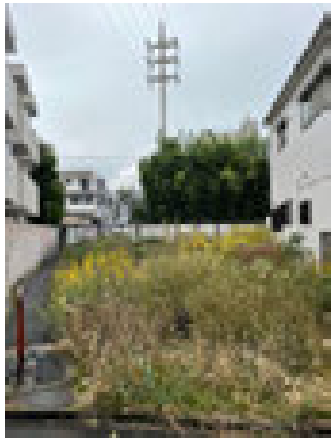
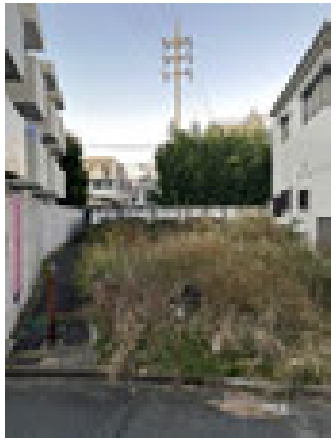
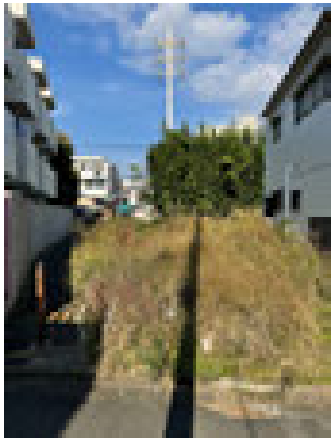
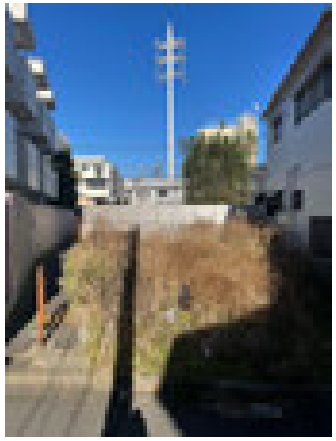
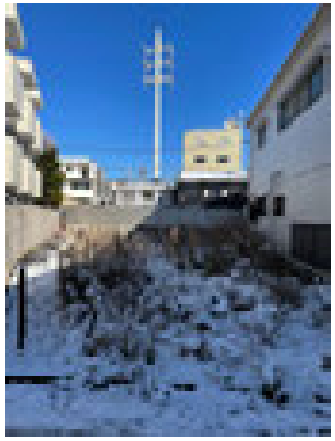
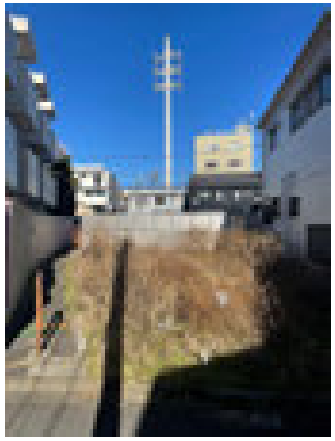
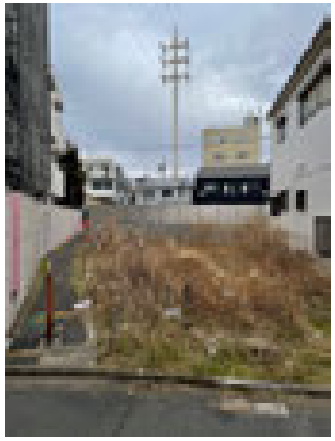


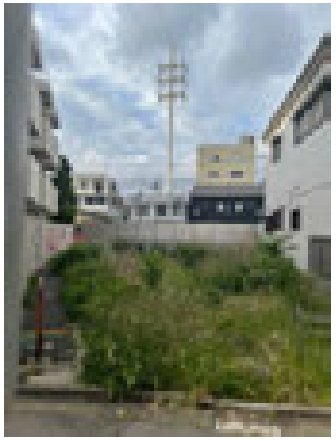
この土地をグーグルマップの航空写真で見てみた。塀のむこうがわも別の空き地が広がっており、最近工事が始まった。
境界の塀も新調されている。

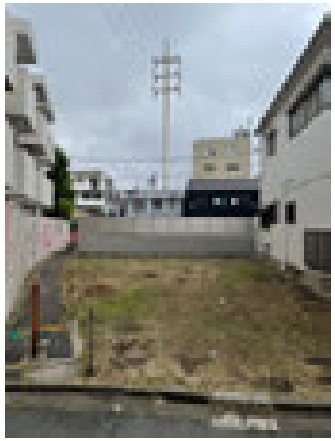
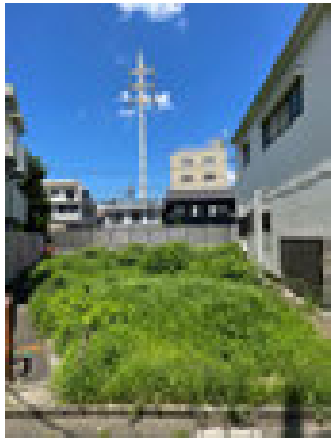
2020年6月24日

2021年1月25日





2021年10月14日

2022年1月7日

回収を待つ粗大ゴミも、考えてみれば束の間の存在・消えゆく風景。
置き方に工夫やセンスを感じる時がある。たくまざるインスタレーションとは考えすぎか。

見立て｜2つ並んでいるもの

2つ並んでいるものを見ると、つい何かに見立てなくなってしまう。
自動販売機もけなげなモチーフだ。右は当然カップルの姿と見立ててしまう。

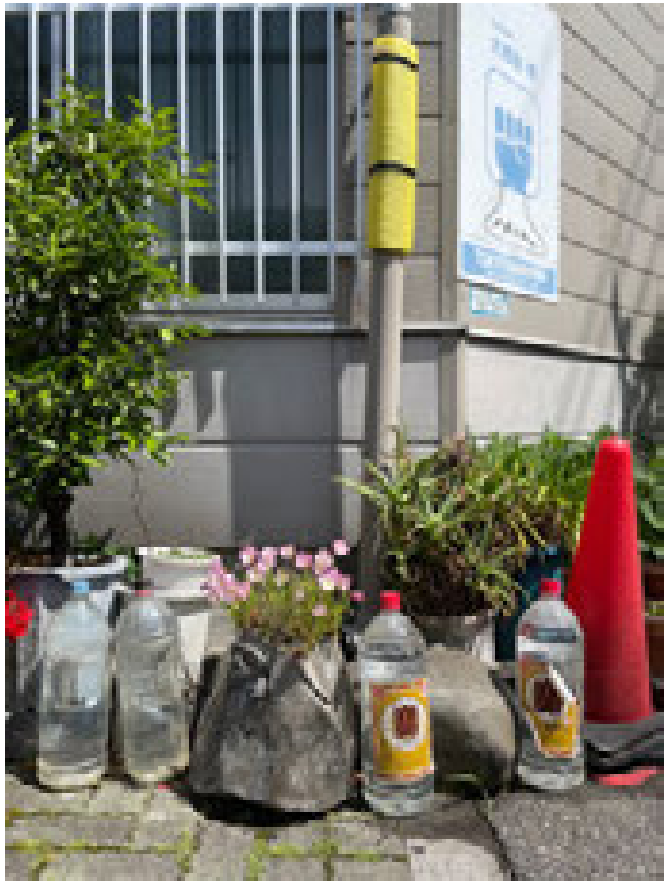
3）モリヤマプロジェクト同行記

阿佐ヶ谷→東中野ポレポレ坐

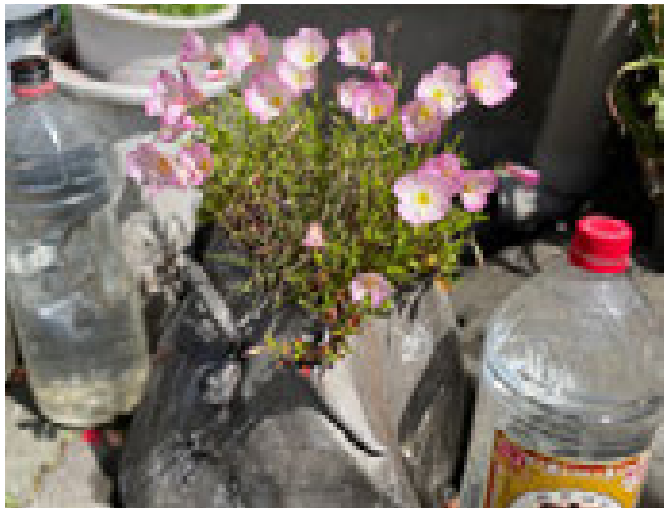
歩きながら写真を撮る。桃園川緑道（暗渠）を歩く。

モリヤマプロジェクト（仮）とはアートフルアクションの森山さんが作品化を目的に行っている、民家の古材を福島へ里帰りさせる紀行パフォーマンス。
そこに同行撮影した、お散歩ふぉとのケースワーク。
阿佐ヶ谷→東中野ポレポレ坐まで主に桃園川緑道（暗渠）を歩いた。

ストリートアートのステッカーについて、少しは知識があるつもりで上の丸いシールもそうなんじゃないかと曖昧に考えていたが、ネットで検索したら公式のものであることが判明。(ネットの知恵袋に感謝するばかり)
もうちょっと整然と貼ったら誤解されずにすむのにと思う。(まあ、どうでもよいのだろう)



廃物利用の植木鉢。
前衛的デザインの茶器のようなつぶれ具合。



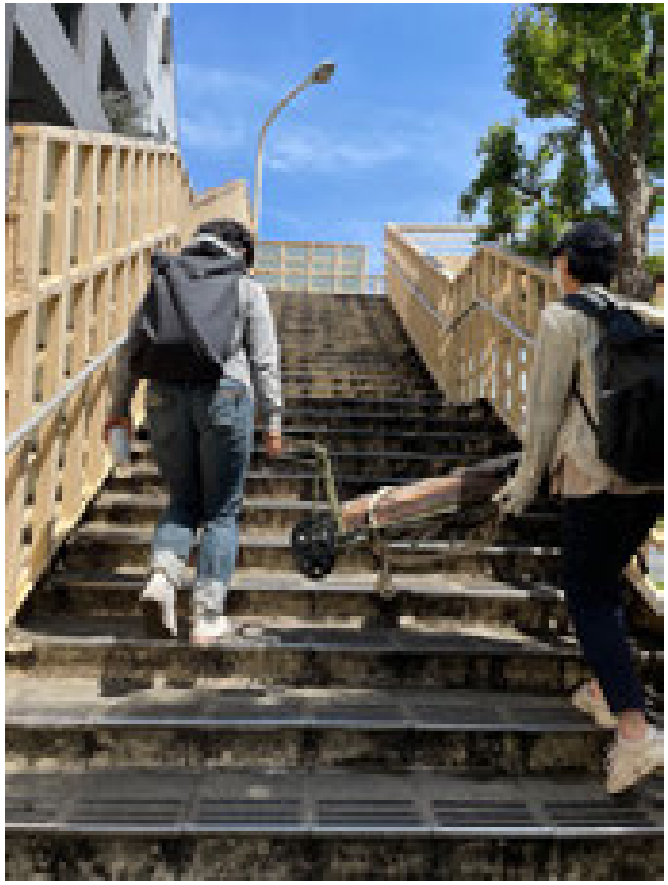
控えめなグラフィティー。自信がないのか、あるいは器との一体感をめざしているのか。いずれにしても違法なのだが。

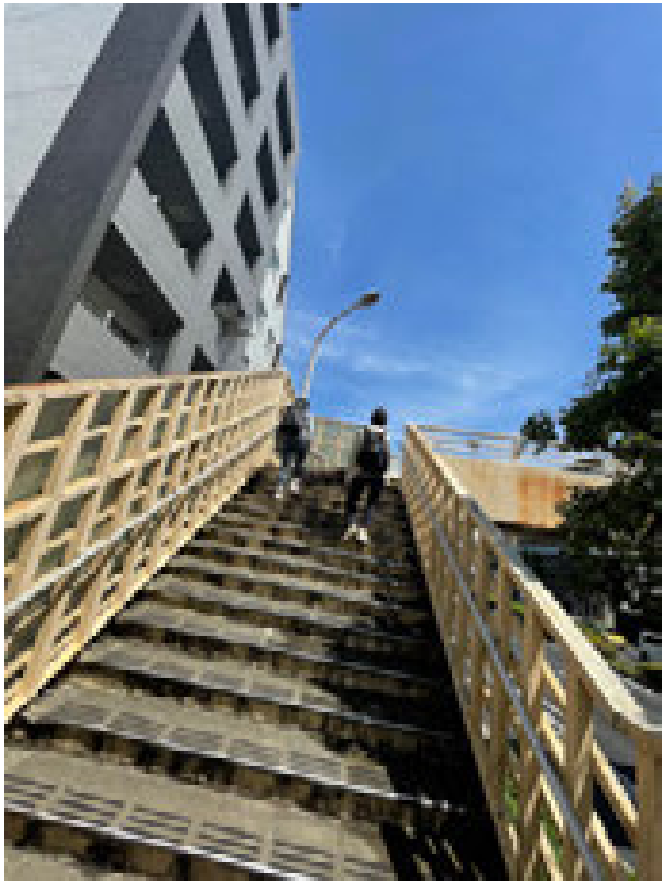
告知看板のデザインに持ち主の口調のようなものを感じる。
冷静にせっとくされている感じ。

桃園川緑道には、川辺をテーマとした生き物（河童は想像上の静物だが）の彫刻が配されている。お供え物もたまに見かけるが、これはキュウリのヘタ？

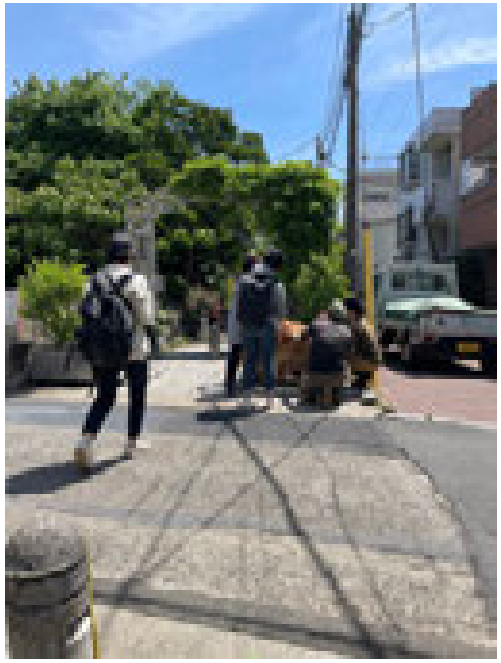
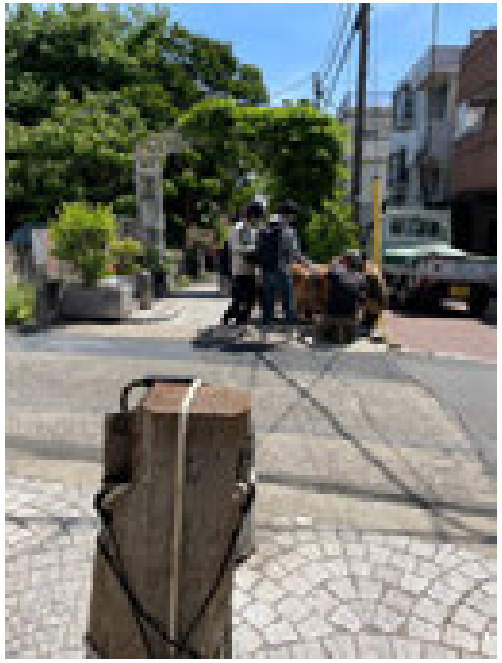
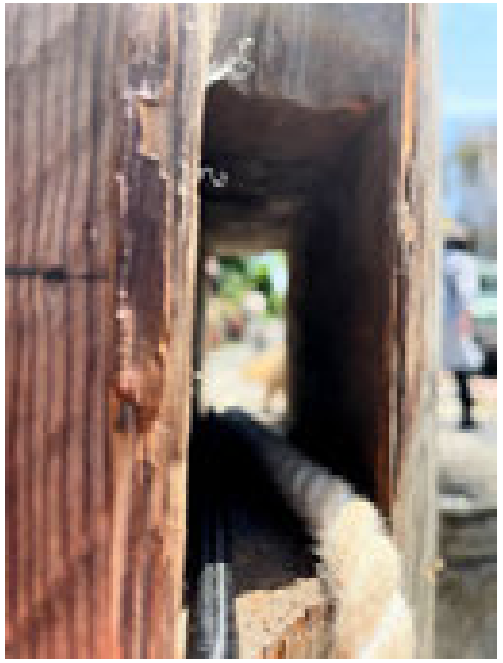
道路標識も好んで撮影する。

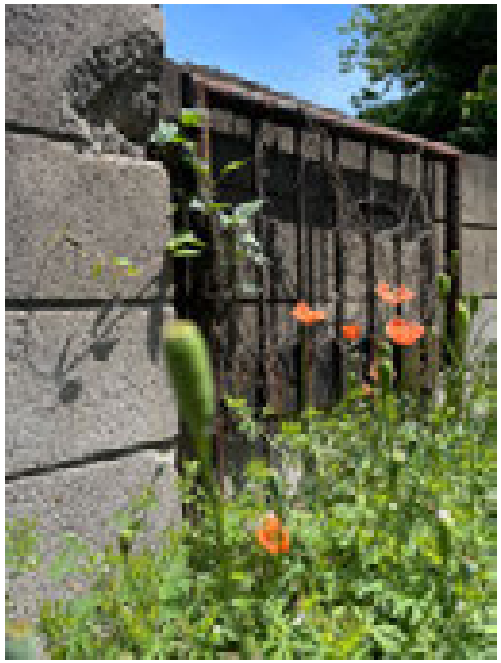
とりあえず、解体現場は押さえておく。

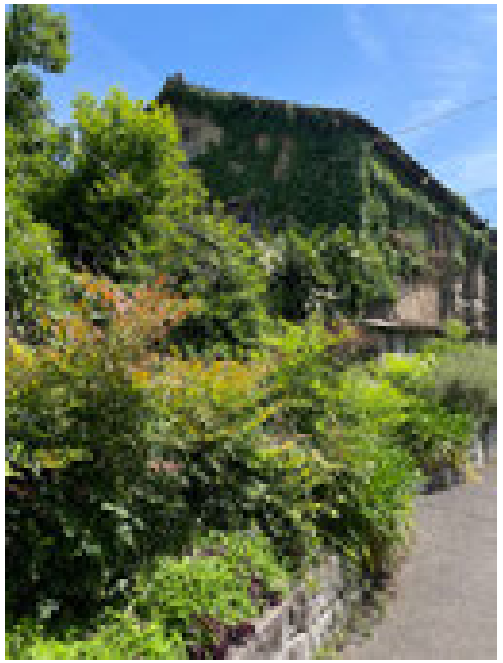
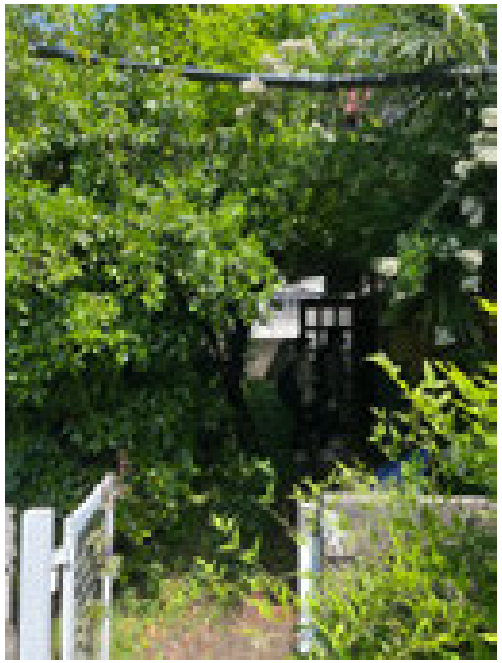


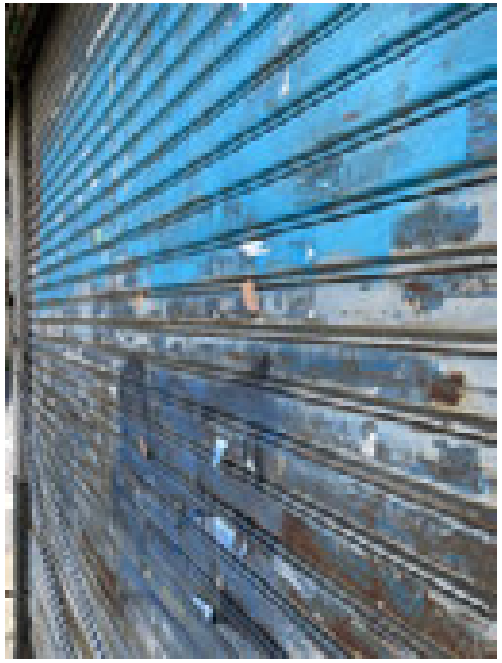
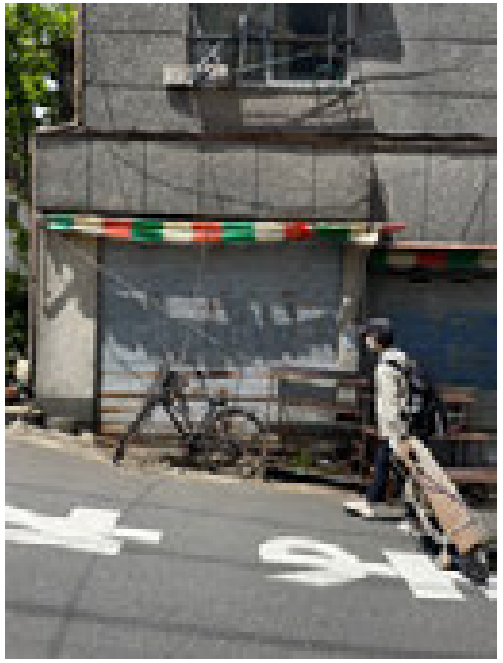


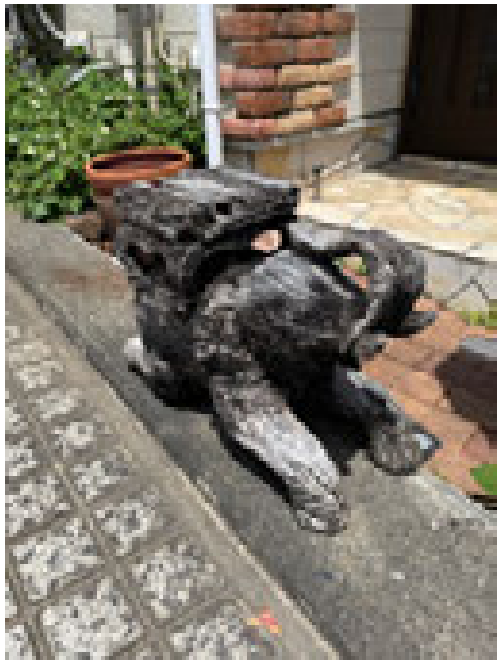
バス停



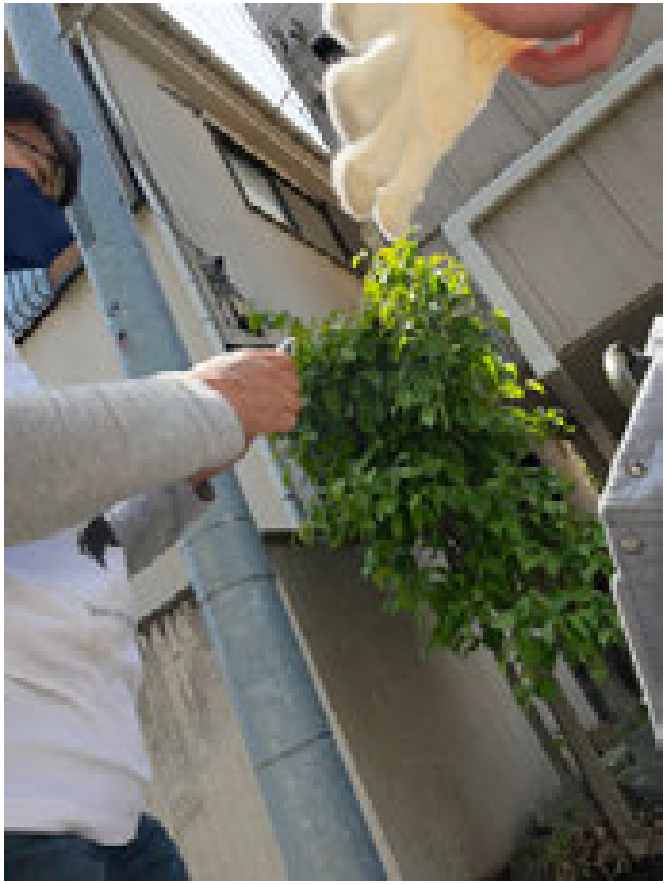





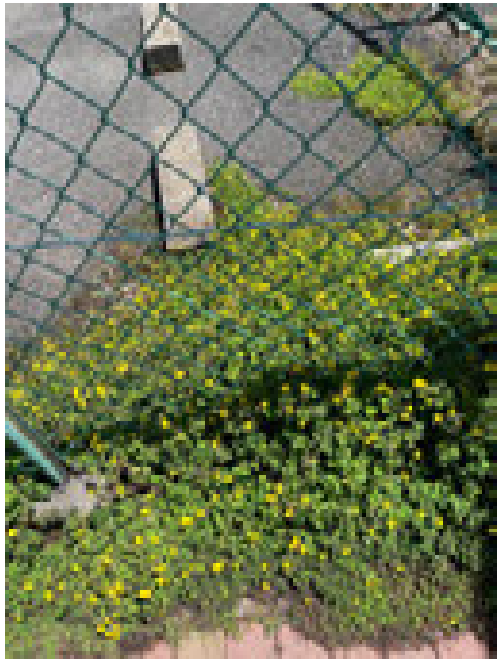
コインパーキングの一部に、変わった店舗。ありもしない物語を妄想してみる。

タクシーの東京無線と自動販売機のコラボレーション企画。あんどん付きの自販機がかわいい。

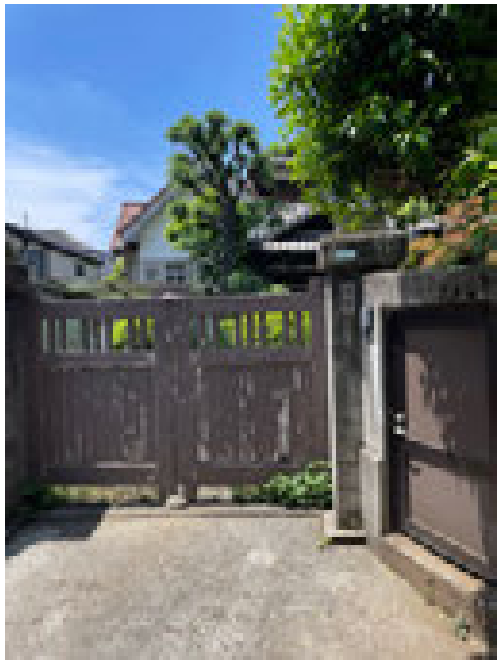


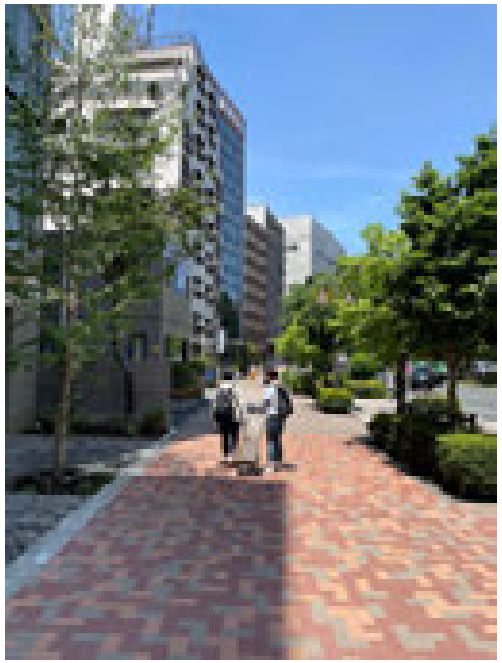
誤写。間違いにはちがいないが、新鮮なアングルにはっとさせられることも。

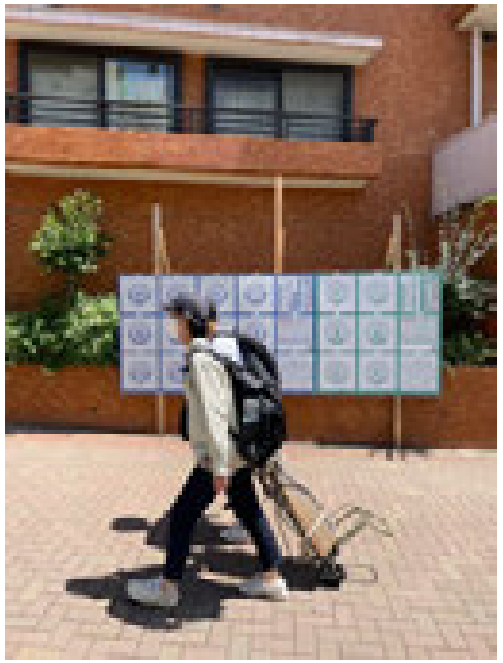
BOUTIQUE



中野一丁目







東中野四丁

画像引用文献

・赤瀬川原平『超芸術トマソン』白夜書房_1985年（初出_『写真時代』 1981年1月号-1985年4月号）

・赤瀬川原平ほか『路上観察学入門』ちくま文庫_1993年（1986年刊行から文庫化）

・路上観察学会『昭和の東京』ビジネス社_2009年

・赤瀬川原平『老人とカメラ-散歩の愉しみ』実業之日本社_1998年（連載時1991年-）

・赤瀬川原平『路上の神々』校正出版社_2002年（連載時1991年-）

引用サイト

・リヒターははたして「画家」なのか? キュレーターふたりに聞く「ゲルハルト・リヒター展」。桝田倫広×鈴木俊晴【前編】| Tokyo Art Beat（Tokyo Art Beatアプリからのみ）

https://www.tokyoartbeat.com/articles/-/richter.exhibit-crosstalk-01-2022-07-11

・Tina Tamashiro 玉城ティナ (@tinapouty)　www.instagram.com › tinapouty

・青空文庫_寺田寅彦「カメラをさげて」 1931年11月初出（1878年生まれなので50歳台か）

概要　https://www.aozora.gr.jp/cards/000042/card2460.html

本文　https://www.aozora.gr.jp/cards/000042/files/2460_10266.html

・Hikaru Utada (@kuma_power)　www.instagram.com › kuma_power

参考サイトリンク

・ okazu通信 第74号「TONAというアーティスト」: インドの子どもたちの今を知る

http://blog.livedoor.jp/wall_art/archives/52073306.html

・ 片手袋研究17年　タモリ、マツコとも共演　「まるで呪い」充実感とうんざりの間で | よろず～ニュース

https://yorozoonews.jp/article/14632839

・ JR中央線まぼろしの駅 中野～荻窪間に計画された「馬橋駅」とは何だったのか? | アーバン ライフ メトロ - URBAN LIFE METRO - ULM

https://urbanlife.tokyo/post/56477/

・「 電線絵画展－小林清親から山口晃まで－」| 展覧会 | 練馬区立美術館

https://www.neribun.or.jp/event/detail_m.cgi?id=20201211607684505#

・ 中野、高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪…“中央線カルチャー ”のど真ん中を流れる「桃園川」の暗渠には何がある? | 文春オンライン

https://bunshun.jp/articles/-/55161